

公開シンポジウム

公開シンポジウム

2022 年 8 月 28 日（日）10:00～12:00

フィールドワークが明らかにするイルカ・クジラの生態

世界中に生息している約 90 種の鯨類のうち、日本周辺では約 40 種を観察することができます。本大会の会場がある三重県の沿岸にも小型の鯨類の仲間、スナメリが生息しているほか、日本周辺には、南から北まで種々の鯨類が見られます。これらの鯨類は、その暮らしぶりもまた多様で、沿岸で定住生活を送っているものから、広く海洋を回遊しているものまで見られます。

そんな彼らの生態を明らかにする上で欠かせない調査手法が、フィールド調査です。フィールド調査には、個体識別調査を始め、衛星標識やデータロガーなどの機材を使用した調査、死亡・漂着したものを対象とするストランディング調査などがあり、どれも鯨類の生態を明らかにする上で重要な調査と位置付けられます。

本大会の公開シンポジウムでは、日本各地にて鯨類のフィールド研究に取り組む 3 名の演者に、どのような手法を使って調査研究を行い、どのようなことが明らかになってきたか、また、調査における苦労話や課題なども含め、鯨類研究の“今”をご紹介します。

プログラム

10:00～10:05 開会挨拶・趣旨説明 西田美紀（人間環境大学環境科学部）

10:05～10:35

「伊勢湾・三河湾におけるスナメリのストランディング調査および収集した試料を活用した食性解析」

古山 歩（三重大学大学院生物資源学研究科）

10:35～11:05

「ザトウクジラの回遊研究 国際的な研究活動も含めて」

小林 希実（沖縄美ら島財団）

11:05～11:35

「Uni-HORP による北海道東部海域でのシャチの生態研究」

大泉 宏（東海大学海洋学部）

11:35～11:55 総合討論

11:55～12:00 閉会挨拶 吉岡 基（三重大学大学院生物資源学研究科）

公開シンポジウム

伊勢湾・三河湾におけるスナメリの ストランディング調査および収集した試料を活用した食性解析

古山 歩（三重大学大学院生物資源学研究科）

スナメリ *Neophocaena asiaeorientalis* は、日本の内湾や沿岸域に生息する小型ハクジラ類である。本種は、頻繁にストランディング（生死を問わず漂着・座礁・迷入）することが知られており、主要な生息海域の一つである伊勢湾・三河湾においては年間 30～80 件程度のスナメリのストランディングが発見されている。伊勢湾・三河湾では、周辺の大学、水族館、博物館、行政によって構成される伊勢湾・三河湾ストランディングネットワークによって、スナメリのストランディング調査が積極的に行われており、調査によって収集されたデータや試料を活用した研究も行われている。ストランディングするスナメリから得られるデータや試料は生態研究において貴重なものであるが、ストランディングする個体の体長や発生する季節には偏りがあり、均一なデータが揃えづらいことや、死亡漂着の際には腐敗が進み適切なデータや試料を収集できないといった問題点も存在する。

本講演では、これまでに収集されたデータをもとに伊勢湾・三河湾におけるスナメリストランディングの傾向やそれに伴う研究遂行上の課題を紹介するとともに、ストランディング個体から得られた試料を活用した研究事例として本種の食性解析について紹介する。

公開シンポジウム

ザトウクジラの調査研究 国際的な研究活動も含めて

小林 希実（一般財団法人 沖縄美ら島財団）

ザトウクジラは、夏は高緯度の冷たい摂餌海域で餌を食べ、冬は低緯度の温暖な繁殖海域に回遊して交尾や出産などの繁殖活動を行う。北太平洋では、ロシア、アラスカ周辺等が摂餌海域として、ハワイ、メキシコ、日本周辺等が繁殖海域として知られる。

（一財）沖縄美ら島財団では、沖縄周辺に來遊するザトウクジラの調査研究を 1991 年から実施している。調査では、尾びれ写真による個体識別を主体として、衛星標識、ドローン等を用いた回遊経路や繁殖行動、ホエールウォッチングやスィム産業の影響等に関する研究に取り組んでいる。これまでの調査から、沖縄周辺に來遊するザトウクジラの約 7 割が、過去数十年に亘り繰り返し沖縄周辺を繁殖海域として利用していることや、ロシア周辺を主な摂餌海域として利用していることなどがわかってきた。また近年は、国内外の研究機関と協力して海域間の個体交流に関する研究にも力を入れている。国内では、北海道、小笠原、奄美、屋久島等との海域間交流について、自動照合システム等を用いた研究を実施している。また、今年から北太平洋全域を対象とした国際的なザトウクジラ研究プロジェクトが開始され、海域間交流や回遊経路の解明が進められている。本発表では、これらの調査活動についてご紹介する。

公開シンポジウム

Uni-HORP による北海道東部海域でのシャチの生態研究

大泉 宏 （東海大学海洋学部）

北海道東部海域にはシャチ(*Orcinus orca*)が定期的に来遊する。演者らは東海大学の他、三重大学、北海道大学、京都大学、常磐大学の海棲哺乳類研究者およびその他の協力者と研究グループ「北海道シャチ研究大学連合 (Uni-HORP)」を組織し、2011 年以来組織的に道東のシャチの生態研究を行ってきた。北海道東部ではシャチは主に釧路沖と根室海峡の二海域に来遊する。Uni-HORP の調査では個体識別による出現履歴の追跡、衛星標識による行動追跡、コールレパートリー解析による社会構造の分析、DNA による生態型判別を行い、道東のシャチ個体群の属性を研究してきた。その結果、北海道東部のシャチには少なくとも二つの個体群（生態型）があること、生態型が同じで、ある程度の血縁関係が予想されるものの行動圏が大部分異なる集団があること、ロシア水域の個体群と何らかの関係があることが示唆されている。今後も長期的な個体追跡を続けて行くことで個体群の動態が明らかになっていくことが期待される。しかし、調査体制を長期的に維持することには制約も大きく課題となっている。